



### (3) 評価の工夫

考察など、自分の言葉で記述することに抵抗のある児童や、意欲を持ってない児童も少なくはない。書く意欲を引き出すために、よく書けた項目や内容について評価し、各学年の問題資質・能力である「比較」「関係付け」「条件制御」「推論」の思考ができているものを特に評価した。また、評価の高かった児童の考察を称賛し、他の児童に積極的に紹介した。良い例を聞くことで参考にして書く児童が増えた。

### (4) 確認テスト

単元の学習のまとめとして、学習の理解度を測るテストを行い、児童自身が理解していないところを明らかにした。一人一人の習熟度を確認、個別支援を行った。

### (5) まとめ

単元の最後に、自分なりのまとめのページ（見開きノート、新聞、ポスター）を設けた。絵や図、グラフ、文章を使い、まとめ、学習理解を深めた。また、理科の用語が正しく使えるように、複数のキーワードを含むようにさせ、生活の中などで応用されていることにも目を向けさせるようにした。

### (6) 情報機器の活用

#### ・活用例 3年生 「昆虫と植物」

学習意欲の喚起、思考力・判断力・表現力の育成を目指し、情報機器を活用しての授業を行った。校外へ虫採りに行き、一人一匹、昆虫を飼育した。自分の捕まえた昆虫ということで、愛着を持ち、意欲的に観察することが出来た。「昆虫の体で面白いな、不思議だと思う所はどこだろう？」と課題を立て、児童一人一人がデジタルカメラでその箇所を撮影し、その写真を元に、発表会を行った。まず、自分の言葉でノートにまとめ、頭・むね・はらといった言葉を正しく使えているかを確認して、発表原稿を書かせた。全児童が写真を確認できるように、プロジェクターで写真を映し、児童は指示棒で気付いたところを指しながら説明した。発表中も、足の数や足の生えているところ等おさえるべき箇所を、教師が説明を加え、新しい発見を喜びながら発表し合った。発表後には、自分の昆虫と比較してまとめた。



「あしは六本です。」  
「ぼくのも六本だよ。」  
『こん虫のあしは、六本ですね。』



「足の先にはギザギザな毛みたいなのがあるよ。なぜだろう。」  
「あしはむねから生えているんだ。」

## 4 成果と課題

- ① 言語活動の充実を図ることで、記述や発表に抵抗が少なくなり、意欲的に取り組めた。
- ② ノート指導を徹底することで、分からないことはノートを見て確認するようになった。テスト前でもノートを元に学習を進める児童が増えた。また、問題解決の思考の流れが、目で見ても明確になることで、学習理解が深まった。
- ③ 評価を工夫したことで、意欲の喚起が見られた。
- ④ 確認テストを行い、学習の習熟度をみた。
- ⑤ 理科の用語を適切に正しく使い、まとめる学習を行ったことで、言葉や学習の確認ができた。
- ⑥ 言語活動を充実させるための時間や実験観察する時間の確保が必要である。
- ⑦ 児童の良い点や進歩状況などを積極的に評価しつつ、児童が主体的・意欲的に活動できるような充実した指導と評価の工夫が求められる。
- ⑧ 学年間のつながりを重視した年間指導計画の見直しを図り、指導法の改善を行っていきたい。